

次のステージ

—新たな関係づくり—

NPO 法人 教育支援グループ

Ed.ベンチャー



【運動会参観…移り変わる意味に思う】5月19日は陸前高田市内の中学校が一斉に運動会でした。小友中学校が「瓦礫の中での運動会」を実施してから1年が過ぎたのです。当時、市内で最も早く運動会の実施に踏み切った小友中学校の学校長は、後にEd.ベンチャーの報告書に当時を振り返って次のように記しています。

小友中にとっての運動会は、震災からの再生に向けて大きな意味をもつ行事となりました。「頑張れ」の掛け声が「頑張ったね」に変わりました。生徒たちはもちろんですが、職員も震災後、会う人会う人から「頑張れ！」と励まされ続け「もうこれ以上何をがんばればいいのか？」という投げやりな気分にもなりつつありました。運動会を見に来た人たちから賞賛の言葉、ねぎらいの言葉をかけてもらえ、保護者や地域からは「中学生の頑張りに励まされた。元気を貰った。」というお礼の言葉や手紙もとどきました。運動会を境に、小友中を見る皆さんの目が転換したように思います。

出来事の意味づけられ方は、その後のその出来事をめぐる成り行きの中で変化していくことがしばしばあります。例えば、ある辛い出来事があり、それはそれとして大変辛いことなのですが、それをきっかけにその後続く多くの出来事が良ければ、人はその出来事をプラスに意味づけていくことができます。「あんなことがあったけど、その時にいろいろ経験したからこそ、今がある」と。

昨年の運動会を振り返る時、それは、震災によって受けた小友中学校の物的・人的被害を、その学校の教師や生徒がどのように意味づけていくか、その方向性を示すものだったように思います。当時、この運動会の一部のネットでは「やけくそとしか思えない運動会」



「綱引く元気あったらガレキ片付けろよ」といったコメントがつけられたりもしていました。しかし、今年の運動会を参観し、そのコメントが、被災地に暮らす人たちの想いと、いかにかけ離れたものであったかをしっかりと意識させてくれるほど、力強い、そして一体感を感じる運動会が繰り広げられていました。

小友中学校は全校40名ほどの小さな中学校で、全校種目もたくさんありますから、応援席がカラになることもしばしばです。そうした時には、運動会を見学に来ている保護者の方が、子どもたちの応援席に入り、応援合戦を繰り広げます。その見応えのある応援に、少子高齢化の進む地方で、そこに生き続ける人々の温かさやたくましさのようなものを感じました。

今年はこの時期、小友中だけでなく、市内の他の中学校でも運動会が行われていたが、小友・米崎・広田地区にとっては、今年の運動会が閉校前の最後の運動会という特別の意味をもっていました。各学校の開会の挨拶には、震災を越えたこと、多くの支援がいただいたこと、そして、これが最後であることが盛り込まれておりました。震災の前年、小友と米崎の学校統廃合は、震災と重なり白紙となりました。しかし、震災後に街づくりの計画の中で決着したのは、小友・米崎に広田も加えた3中学校の統廃合でした。震災前の2校から1校への統廃合が、震災後3校から1校へと進んだわけですが、統廃合の賛否は意見の分かれるところだとは思いますが、去年は震災後の復旧に全力をあげていた学校が、

今年も統廃合の準備として、行事に「最後」という意味が加えられるのをみて、震災後、復旧・復興どころか、規模がどんどん小さくなっていく姿を象徴しているようで、意味の移り変わる早さに戸惑いを感じたりしました。

【新たなステージ】支援を旗印に被災地に向かっていると、昨年のような緊急支援を受け入れるムードとは異なる雰囲気を感じられます。それは、緊急支援の必要性が薄れる中で、被災地で生活するわけではない「よそ者」が、少し邪魔に感じられるというムードとでもいいでしょうか、「ほっておいてほしい」というような感じなのかもしれません。そんなムードを感じると、引く時期なのかと考へたりします。

そこで一旦立ち止まって考えるのは、ここで引くことを選ぶとき、そこに残るものはいったい何かということです。想像するに、それは、支援者側に残る「満足感」と、被災者側に残る「感謝」という「きれいな関係」です。支援者と被災者が対等な関係ならば、それも受け入れられるものなのかもしれません。しかし、今回の震災には、地方と都市の関係、産業構造の問題など、日本社会の未来を想像した時に、考えるべきたくさんある課題があるのです。それは、支援者と被災者の関係に留まらない関係の中で、ともに取り組む可能性があるもののように思います。

教育支援チーム「まつ」は、そうした関係を作る場として立ち上げられました。今回の支援で、Ed.ベンチャーの事務局長の家上は、「まつ」の事務局のお手伝いに、支援隊とは別行動で単独で2日ほど陸前高田に残りました。数年前、Ed.ベンチャーを手探りで始めた時と同じように、「まつ」を陸前高田の教育課題に迫れる団体として形作るお手伝いに、事務局長は励んでいます。また、教員である柿本は、陸前高田の子どもと大和市の子どもを結ぶ新たなつながりをつくるための企画を、陸前高田の教員とともに練り始めました。また、研究者である清水は、陸前高田で研究者としての活動を本格的に始めました。これまで「支援隊」として一括りで活動してきたEd.ベンチャーの会員も、それぞれが自らの立場に立脚して仕事をする時期にきていると感じるところです。

【支援隊活動記録】

■陸前高田支援 ○5月11～13日(第40回):「すたんどばいみー」の企画による陸前高田の子どもたちの大和祭参加、□支援隊メンバー: <送迎>チューブサラーン(すたんどばいみー)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、<引率>佐々木善仁(「まつ」事務局長)

○5月18～22日(第41回):教育支援チーム「まつ」理事会参加・事務局手伝い・運動会参観、広田中貸出のライト回収、小学校運動会参観依頼、□支援隊メンバー:家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長)、清水陸美(東京理科大学)、柿本隆夫(下福田中学校)

■寄付(4月20日～5月24日) 手塚文雄、権田和子、櫻井千夏、大野かよ

★★継続的な支援のために、寄付を募っております。ご協力をお願いします★★

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



「まつ」通信 No.2

探りながらも前へ

2012年5月30日発行

陸前高田も寒暖の差に激しさを感じながらも、5月は暖かく感じる日が増え、夏に向かうことを感じるようになりました。事務所のある仮設住宅に住むお年寄りも外に出てくることが増え、声をかけたり、かけられたりすることも少しは多くなったような気がします。仮設のある広田は漁師の町です。「漁師は死ぬまで漁師」と言われるように「定年」がありません。ですから、震災前までは、自分の意志や体調にあわせて、年齢に関係なく海に出たり、そうでなければ家の周りの畑に出たりして生活を営んできたわけですが、それが一気に失われて、今は、やることがない。以前は、漁や畑の仕事の大変さに不満をもつことも多かったのに、動き回るのが仮設住宅の小さな範囲だけの生活はあまりにも窮屈で、生きている気もしないという感じなのではないかと思えます。「動けることが幸せ」と思ってきたのに…」「海で死にたい、畑でポックリ逝きたいと思ってきたのに…」、「そんな言ってみても仕方がないことを、あれこれ考えて暮らしています」といった声が聞こえてきそうです。

さて、5月の「まつ」の活動は結構忙しいものになりました。第1には、平成22年度の事業が3月で終了しましたので、「総会」を開催しなければなりません。「総会」の日時は6月15日と決まりましたが、それまでに「総会」の形を整えなければなりません。今現在、平成23年度事業報告・決算、平成24年度事業案・予算ができあがりつつあります。また、6月15日には総会とあわせて、学校支援連絡会を開催したいと考えています。昨年度構想していた学校へ物資を提供する財政状況にはありませんが、緊急的に必要と判断されるものには対応していきたいと考えており、そのあたりも含めて相談させていただく会にしようと考えております。現在、会員への総会の案内、会員の募集、学校支援連絡会の案内をしながら学校訪問をしているところです。

第2には、Ed.ベンチャーの学校訪問で拾い上げられたニーズである「市内の教師が集えるサロンのような場所」の確保です。被災した学校に勤務する教師には、これまでとは違ったストレスがかかっていると言われます。学校設備や備品等の不備、仮校舎である場合にはそれまでとは異なる外部との交渉、支援団体への対応といった外向けのことだけでなく、被災状況の違いを意識し配慮した子どもへの対応や保護者への対応、教師集団の中にある被災の違いに配慮した振る舞いなど、挙げ始めたらキリがありません。そうしたことに対応すべく、市の教育委員会は教師の相談員の派遣を行っているようですが、「場所がない」というのです。市庁舎の教育委員会の片隅に便宜的にそのような場所をつくってはあるものの、「そこでは、相談があっても来ないでしょう」という感じのようです。そこで、市内でどこかプレハブが建てられるような場所はないかを探したところ、小友町の後藤稔さんから提供いただけそうなどころまで来ています。もし、この土地を借りられるとなると、どんな施設がいいかなど、具体的な企画が必要になります。このあたりは、総会でも相談させていただきたいと思えます。それに具体性が出てくれば、助成金の申請という段取りになると考えています。

第3は、Ed.ベンチャーの支援に同行して、モビリア避難所で子ども支援をしていた外国人当事者団体「すたんどばいみー」の大和市でのイベントに、小友地区の中学生4名が招待されました。子どもたちだけでは何かと心配もあるので事務局長が同行しました。以

下は、事務局長からの報告です。

■事務局長日記■

5月12、13日の2日間、Ed.ベンチャーが活動の拠点としている大和市で「市民まつり」が行われ、小友中学校生徒4人と一緒に行く機会をいただいた。

11日（金）夕方、神奈川県大和市から着いたばかりの家上さん、サラーンさんと簡単な打ち合わせ後、小友中の生徒を乗せ、陸前高田市を出発したのは、午後8時過ぎだった。

12日の午前2時半頃、横浜市の柿本先生宅に着く。走行距離およそ550キロ。Ed.ベンチャーの方々が東日本大震災直後から毎週この距離を救援のために通ったのだと思うと改めてこの凄さに頭下がり本当に感謝の気持ちで一杯になった。

一寝入りして午前8時30分頃、大和市民まつり会場である大和市民引地台公園に向かう。公園内には、様々なブースが開店時刻を目前にし、忙しそうに準備をしていた。

すたんどばいみーのブースでも、高校生ら十数人が、焼きそばを焼くためのセッティング、メニューや日常の活動の紹介の掲示、食券の準備など忙しそうに動いていた。そんな所に私たちがお邪魔したのに、メンバーの皆さんはわざわざ手を休めて、にこやかに自己紹介をしてくれた。小友中学校の生徒たちは、メンバーの中に陸前高田市まで支援に来た子がいるようで、久しぶりの再会に喜び合っていた。

午前10時。同じ敷地内に「大和B級グルメ王座決定戦」Y-1グランプリのためのプレ出店があって、そちらの店は、開店前から長蛇の列ができたが、すたんどばいみーの出店には、お客さんはポチポチでちょっと心配。そのうち、小友中の生徒もメンバーと一緒に大きな声で呼び込みを始めてからは、大部お客さんが来るようになり、終了時刻（午後4時）には、かなりの数を捌いていた。

出店を出した今回のメンバーは高1が多いということだが、懸命に頑張る姿そして次々と応援に来る先輩のと深い繋がりを見て、とても感動し、途中でなかなか帰れず、結局閉店までいることになった。

今回すたんどばいみーの活動の一端を見せてもらい、外国の子どもたちが閉鎖的な日本社会の中で生活するには大変な苦労や葛藤、忍耐の連続で、これから先も様々な困難な壁を乗り越えなければならないと思うが、皆明るく元気に逞しく活動しているすたんどばいみーの子どもたちを見て、たくさんの元気をもらって帰途についた。



★会員募集中です★陸前高田の教育をともに考えましょう★

寄付を募っております！ご協力お願いいたします！

銀行名：東北労働金庫 支店名：高田支店 口座番号：普通 5903255
口座名義：教育支援チーム「まつ」 代表 鈴木正彦
(キョウイクシエンチームマツダイヒョウスズキマサヒコ)

教育支援チーム「まつ」

〒029-2208 岩手県陸前高田市広田町字大久保 124-1 旧広田水産高校仮設住宅 19-6
Tel/Fax:0192-56-3325 e-mail: teammatsu01@gmail.com